

概要報告

実施期日	8月1日(金)
部会名	中学校 国語部会

テーマ 『テストが変われば授業が変わる』～生徒に学力をつけるテストとは～

提案概要

「テストが変われば授業が変わる」～生徒に学力をつけるテストとは～という表題を掲げ、指導と評価の一体化・評価方法等の工夫による授業改善の取組を報告した。(これを実践するにあたって、ベテランの教師4名と若手の教師4名の8人グループで、評価資料の中のテスト問題に視点をあて、具体的に各自が作成したテスト問題を基に研究を進めた。)

【提案内容】

- 学校で育てる学力、学習評価の意味について
- 領域ごとの評価方法、領域別評価計画(案)について
- テスト問題を作成する手順について(光村図書中学校3年「握手」の実践例を示して説明)
 - ①教科書の教材の学習目標が学習指導要領のどの内容にあたるか
 - ②この目標を実現させるための学習活動とそれを評価する方法
 - ③評価基準を決める
- 「書くこと」の領域でのテストの評価基準(採点基準)の具体例について(加算法)
 - ①1段落目に評価の観点と評価の言葉が入っている…2点
 - ②2段落構成で書けている…2点
 - ③2段落目の内容は評価の根拠となる叙述を含んで、具体的にその良さが書かれている…2点
 - ④100字～150字で書く…2点
 - ⑤他の作品と妥当な比較をしている…2点
 - ⑥誤字脱字、ひらがなばかりの文章…各-1点とし、良さが二つ以上具体的に、あるいは多面的に深く掘り下げられ書かれている場合は+2点とし、「A」は10点以上、「B」は6～8点。
- 指導計画時にテストによる評価も一緒に考えることについて→常に生徒につけたい力を意識し、それをどう評価するかを考えている状態を保ち、指導と評価の一体化を図ることができる。
- テストが変われば授業が変わる→テストは、生徒にとっては授業で身についた自らの力を知るものとなり、教師には生徒個々の学習到達度の確認であるとともに、自分の授業の在り方の評価や授業改善の資料となる。具体的に評価できるからこそ、身についたかどうかわかる。テストは小さな入口のように見えて授業改善の大きな鍵になる。
- テスト問題を研究する中で気づいた課題→テスト直しのあり方、設問の配点、記述問題の字数や採点基準、選択問題の選択の仕方や選択肢の正確さ、設問の文のわかりやすさ等。
- グループ研究について→仲間を作ってグループで研究を進め、それを発信していくことは大変価値あることである。実践を知る機会、自分の授業を客観的に考える機会、より良い実践を共有する機会となる。

質疑概要

次の3点の質問が出た。それは、①「学習指導計画にある批評文の指導の具体について」、②「100点満点の定期テスト採点方法について」、③「テストの批評文と授業での批評文の重みについて」である。

①については、ワークシートで指導をしている。感動したこと、潤いを感じたところなど11項目を挙げ、その中から一つ選び、単に批評(批判)するだけでなく、良いことを書くように指導している。

②については、提案者の学校においても国語と音楽科以外は100点満点で作成されている現状だという。部会参加者にアンケートを採っても、9割以上の手が100点満点の定期テスト作りをしていた。教師の他に保護者の意識を変える必要があるだろう等の意見が出た。

③については、基本的には同じ重みで採点しているが、授業で扱ったことに重みを置いているとのことであった。

研究協議概要

四人ずつの8グループを作りワークショップを行った。ワークシートに自分の考え、他者の考えを記入ながら、意見を交流し、参加者自身が言語活動を体験しながら活発に協議を進めた。その内容の抜粋は以下の通りである。(A3の用紙に話し合った内容のキーワードとその説明を記入し、壁に貼って発表という形式を取った。)

<p>わたしたちが身につけさせるべき学力とは？</p> <ul style="list-style-type: none">・社会が求める学力←評価基準 <p style="text-align: center;">↑ バランス ↓</p> <ul style="list-style-type: none">・どんな社会であっても変わらない大切な学力→これをどう大切にはぐくんでいくか	<p>評価の妥当性 ～どうやって生み出すか～</p> <ul style="list-style-type: none">・評価基準の設定 BとAの規準の明確化・記述問題のつくり方 字数・問題文・配点・規準を練らなくてはならない。	<p>テストを含めた単元計画 (説明)</p> <p>身につけさせたい力を明確にして、それをはかるためにテストがあるが、テストだけでははかれない。だから、テストを含めた単元計画を作り、テスト以外(日常の中)でも評価することで、評価の妥当性は上がるのではないかな。</p>
<p>テストが先か？授業が先か？</p> <ul style="list-style-type: none">・授業の評価はテストだけではないのでは？・子どもが生き生きと出来る授業が大切なのでは？・テストを念頭に置いて、子どもにどんな変化があったのか知りたい・授業の広がり制限がかかることはなかったか知りたい	<p>最終目標は入試で良いのか？</p> <p>教育が子どもに身につけさせたい力と、子どもが求めている力(入試で点を取る力)が全て合致する訳ではない。</p> <p>お互いに寄り添うために、テスト問題の工夫をしてゆく必要がある。</p>	<p>複数での評価の仕方</p> <ul style="list-style-type: none">・評価基準・規準の明確化(複数)・観点ごとに教師が分担し、作成・テスト作成時と採点時のすり合わせ(複数)
<p>テストだけではない、振り返りで見取る (説明)</p> <p>生徒自身が「身につけている力、伸びている力」を実感することが大切である(テストだけではない)。</p> <p>反対に、自分に身につけていない力を知ることができることも振り返りなのである。</p>	<p>評価のスパン</p> <ul style="list-style-type: none">・二学期制と三学期制の違い・学期→1年間→3年間の流れ・日常の授業で評価すること、テストの中で評価することを計画してから授業を行う。	

まとめ概要

発表提案者、指導助言者、部活総括者の方々の話に共通することは、授業改善に役立てるために学習評価について共通理解を図りながら進めてほしいということ、そして今日の研究協議で学んだことを各学校に戻って広めてほしいということであった。国語科の学習評価を進める上で現状として様々な課題があるが、テストを切り口に学習評価について考えることは、授業改善をするために、客観的に自分の授業を考える機会になる。本研究もこれで一区切り、とすることなく、今後も研究研磨を継続し、発展させ、それをいろいろな場で協議していくことが大切である。